

ソベルト・エーコや阿・印・中の仲間たちと30余年、文化相互人類学による知の枠組みの再編を試みてきた。

だがWest公認の学術的方法をRestの文化圏の知と交叉させる試みは、共有すべき作業言語の選択の如何を巡る知の覇権争いを回避できない。ここで翻訳における等価性や透過性に疑義が生じる。通約性の低い基本概念の多言語突き合わせ——これを河野はヨルバ語やアカン語の「真理」概念を通じて試みている。だがそれも、釈義の重畳が招く晦冥さや情報劣化、記述言語選択の恣意性という桎梏から自由にはなり得ない。

チョムスキーかサビア・ウォーフかの論争を蒸し返すまでもなく、情報伝達の信頼性を基軸とする翻訳理論は、知識knowledgeと認知acknowledgeとの位相差に目を瞑る。ここには英米流の製造物責任と欧州型使用者責任との対立も絡まるが、さらには知の所有権、口述・口承の流動性と書記による真理確定とを跨ぐ言説正統性の認証に関する政治学も要請される。

泰西の哲学には儒学に比べ道義観念が僅少だ、とは、幕末に留学先の阿蘭陀で津田真道が西周に反駁した難点だった。

\*『アフリカ哲学全史』ちくま新書、2024年7月10日

ルフ・ウグナーやフランソワ・ジュリアンらが知られるが、彼らは西欧哲学の常識を揺るがせるために、中国古典を元来の文脈を無視して縦横に援用する。河野は取り敢えずイスラームを別扱いとするが、仏語圏で哲学の刷新に挺身するイスラームやユダヤ教関係者、「哲学者」は、管見でも枚挙に暇ない。

アフリカ出身者でも、社会活動家を含め、イスラーム復興運動やグローバル・サウスの論陣に与するか、アフリカ至上主義者か否かを問わず、西欧の学的権威への異議申し立ては喧しい。

日本では美学者が率先して『アジアの美学』を英語で発信もした。だがethno-aestheticsは国籍や地域毎の純粹主義へと回帰する危険を出発点から内包する。民族藝術学の立場も、その提唱時点から、そもそも藝術と美術といった、西欧近代起源の範疇の普遍性との軋轢や葛藤と無縁ではない。

ここで比較の軸の中立的妥当性をいかに確保するかが、改めて問われる。一方河野は川田順造が西アフリカで提唱した三角測量を援用し、他方では方法としての翻訳に改めて注目する。

三角測量は二点の相互決定ではなく、アフリカと欧米との南北軸にアジアからの東西軸を加え、単純な優劣判断を相対化する企てを前提とする。本稿筆者もウ

連載256

## 相互認識の多文化間交渉 三点測量による他者翻訳の可能性と桎梏と

河野哲也著『アフリカ哲学全史(ちくま新書)』に触発された若干の初期的観察

国際日本文化研究センター／総合研究大学院大学、名誉教授

稲賀繁美

アフリカを原点軸に、従来の「哲学」をその前提から書き換える——本書のこの試みは、日本語を媒体になされた最初の企てとして、すでに高い評価を得、本稿筆者もその達成に瞠目している。そのうえで、たまたま別の経路から並行する潮流に棹さしてきた当事者として、現時点での観察を幾つか補って参考に供したい。

およそ希冀に淵源する伝統に服さない学術は、哲学とは呼び難い——この教条はヘーゲル、ハイデガーからアサー・ダントや、アルジェリア出身のジャック・デリダにまで受け継がれる。アフリカ出身の研究者はこの正統性に抗うが、彼らもその多くが欧米の大学で哲学博士号を取得している。

そのうえで非・否西欧世界にも「思想」を超えた「哲学」を認知するとすると、両者の比較が必須となる。比較には共通の基準枠が不可欠だが、西欧を基軸とすればその「外部」は補完のための補遺扱いとなる。逆に独自の伝統に固執すれば「哲学」の枠外に放逐される。

ここで哲学の「普遍性」が問題となる。河野は「普遍的哲学の終焉」を訴えるが、現実には普遍を目指す覇権争いが進行している。英米圏の分析哲学は欧州の大陸哲学の否定だろう。中国思想に「哲学」を認知する論者には、欧米でもルド